

「総合的な学習の時間」と連携した国語科の学習

新しい指導を考える会

1 子どものエネルギーを言葉の力にするために

国語科の学習には、教室の中だけでは完結しないものもたくさん含まれている。特に調べ学習を伴うものや、それを発信しようとする学習などはそうである。「これをやってみよう」「これは、おもしろそうだ。」という関心や意欲をもって活動しているとき、子どもたちは実に生き生きと主体的に動く。このとき、子どもたちは「これは国語科の学習だから」というような概念はない。この子どもたちのエネルギーを学習に生かすことによって、より実生活に生きる言葉の学習になるのではないかと考える。

ここでは、「総合的な学習の時間」と連携して展開した二つの国語科学習の実践を通して、言葉の力を身につけるということについて考えていきたい。

2 「なりきり環境会議を開こう」の実践より

■なりきって話し合うことの意義

環境問題についての話し合いの難しさは、子どもたちが、自分とは直接関わりのないところで正論を主張することに

〈できあがった9つのなりきりチーム〉

- ・ヤンキーチーム（4名）
- ・プラスチック研究所（3名）
- ・江戸っ子チーム（3名）
- ・おくさまチーム（3名）
- ・ダイオキシン研究所（3名）
- ・リサイクルチーム（3名）
- ・お魚チーム（3名）
- ・市役所チーム（3名）
- ・ドイツ人チーム（2名）

〈ポイント〉

ヤンキー（環境に興味のない人）チームを作ったことで、話し合いが非常に活発になった。「今の生活をやめるべきだ」との主張に「本当にやめられるのか」という問いかけや、「江戸時代のリサイクルがすばらしいなら、なぜそれが続かなかったのか」という問いかけなど快適な生活を求める本音の話し合いとなった。

チーム作り際には、「自分がどんな主張をしたいのか」「その主張をするために何になりきった方がいいのか」を考えて作るようにした。ヤンキーチームというのは、「環境問題に興味がない人（今の生活を続けていきたい人）」という設定である。このチームが現在の生活の便利などことを追求したおかげで話し合いが深まり、本音の話し合いとなった。

■「総合的な学習の時間」との連携で生きた言葉を育成する

言葉の不思議なところは、いくらしっかりした主張をしても心に残らないものもあるところである。話し方が上手でも実感を伴っていない主張は、迫力に欠け説得力がない。

ある。「ゴミは捨てない方がいいと思います。」「リサイクルをした方がいいと思います。」など、もったもなし意見は出るが、説得力に欠けることも多い。また、調べてきた資料の羅列で終わってしまい、結局退屈な学習になってしまう場合もある。

そこで、「環境会議」を開くにあたり、自分が「何かになりきって」話し合いに参加することにした。魚になって海や川の汚れで困っていることを主張してもいいし、江戸時代の人になって現在の使い捨て社会を批判してもいいことにした。いろいろな立場から環境問題を考えることによって、多様なものの見方ができると考えたからである。また、「自分とは違う別のものになりきる」ことによって、話すことが苦手な子も楽しみながら話し合いができるのではないかと考えた。

■話し合いを活性化するための手だて

話し合いを活性化するための手だてとして、次の4点を考えた。

- 意見が対立するようなテーマを設定する。
大きなテーマは「ゴミ問題」とし、話し合いの議題は「今の生活やめられますか」とする。
- 聞き合いを有効に機能させるために、インフォメーションギャップ（情報格差）を生かす。
- チーム内で役割分担し、説得力ある主張を作る。
- なりきって主張したり、反論したりできるような場の設定をする。

そういう意味で、資料を読んで写しただけの主張は弱い。自分たちの目で確かめ、足で稼いだ事実を突きつけられたとき、「なるほどそうか」と本当の意味で共感できるのではないだろうか。

調査内容・調査方法を決め、なるべく自分たちの目で見たり、確かめてみたことから主張の根拠となる資料を作るようにした。インターネットや本などの資料はたくさんあるが、自分たちで確かめるとなると、時間もかかるし効率も悪いように感じる。しかし、このような時間の中にこそ、説得力のある言葉の源となる思いが育っているように感じる。

例えば「おくさまチーム」は、ハンバーガーショップやコンビニでお弁当を買ってきて、どれだけのゴミがでるかを模造紙に貼って掲示し、その量の多さや種類の複雑さを訴えていた。また、「お魚チーム」は、家庭用食器洗い洗剤と食洗器用の洗剤とを比較しどちらが環境にいいのかを訴えたり、「市役所チーム」は自分たちの町のゴミが一体どのくらいの量になるのか、それをどのように処理しているのか、お金はどのくらいかかっているのかなどを市役所の人にインタビューして自分たちの主張を作った。「リサイクルチーム」もリサイクルの仕方を学び、自分たちが実践することによって、リサイクルの大切さを感じ取ると同時にその大変さにも気づいていった。

このように、「総合的な学習の時間」と連携することによって、単なる机上の話し合いとならず、「私たちもやってみただけで…」など実感の伴った話し合いにすることができた。

■言葉によって自分を振り返る力

話し合い後の感想で「私はヤンキーチームを責めました。環境問題に興味がないなんて無責任だと思っていました。でも、ヤンキーチームがやっていることや言っていることは、今の私がやっていることと同じでした。私は、これまでにいかに環境に無責任だったかをこの話し合いで知りました。」という言葉が出され、多くの子がこの言葉に共感していた。時間をかけて主張を作り、根拠を探り話し合うことの大切さを知った学習である。

3 テレビ局との連携で実現した番組作り

■小学生による小学生のための教養番組「作家の教室」

私の住んでいる地域には、地元に着した番組を作り、放映しているテレビ局がある。この実践は、国語科の学習で行った作家についての調べ学習を、「総合的な学習の時間」と連携させてテレビ番組に作りあげた実践である。目的がはっきりした学習には子どもたちは真剣に取り組む。テレビ局で働く人からのアドバイスを受けながら番組作りの手法を学び、子どもたちは、大変さと同時に作りあげた時の喜びも味わう。「総合的な学習の時間」に毎週一回、三度にわたって指導助言をいただいた上で、最終的には本格的な機材を持ち込み、四時間を費やしての撮影で番組を作りあげた実践である。実際にテレビ番組として放映されたことも子どもたちにとっては大きな喜びとなった。

■バーチャルインタビューでの作家紹介

調べ学習で得た作家についての情報を視聴者に伝えるために『バーチャルインタビュー』という形で作家紹介をすることにした。

調べ学習をもとに「作家になったつもり」で答えるのだが、「新美南吉が甘いものが好きだった。」「あまんきみこと宮川ひろは親友だった。」「モチモチの木は教科書に載ることになって訂正された箇所がある。」など、自分たちしか知らない情報が宝物となった。また、いかに視聴者を引きつける情報を手に入れるかがポイントとなった。

■撮影開始で学んだこと

「ぜひ、番組作りに協力したい。」という心強い言葉いただき、局長さん自らが毎週「総合的な学習の時間」に来て、番組作りのアドバイスをしてくださった。話すことに夢中になっていた子どもたちに、「カメラを通して番組を見させるとよい。」というアドバイスをいただき、ビデオ撮影も子どもたちが行った。

このことによって、カメラマンとしての視線もでき、「話す人があっちこっちにいるとカメラが追いつかない。」「しゃべりだけでは分からないから、ボードで説明した方がよい。」「インタビュの時は、カメラ目線じゃないほうがよい。」など新しい気づきが番組に生かされた。視聴者を意識した気づきが多く出され、自己満足な番組作りから脱却していくきっかけとなっていた。

■作家の生き方と作品を結びつけて読む

今回の学習の大きなねらいは、作家の生き方と作品を結びつけて読み、調べたことをもとに発信するということがある。読む学習は受け身になりがちだが、「番組を作る」とことでこれまでの学習と違った視点が加わることを期待した。

読書指導は、読みを子どもに任せるという点で読解指導と異なるが、グループの相互交流学習において、自分の読みの振り返りとお互いの意見交換を行い作品について話し合うことで、読みの客観性を求めた。また、好きな作品のあらすじやお気に入りの場面、何を伝えたかったのかなどを書いてまとめ、確かな読みを作るようにした。

番組作りに至る学習活動の流れ

- ① これまで教科書に載っていた話を全部読む。
(光村ライブラリー全18巻を使用)
- ② 読書カードに気に入った本に○をつけ、お気に入りの作家を見つける。
- ③ 自分が見つけたお気に入りの作家の本をたくさん読む。
- ④ お気に入りの作家の本の中でおすすめしたい本を見つける。
- ⑤ お気に入りの作家についての資料を集める。
- ⑥ 番組作りを始める。

調べた作家

- ・新美南吉 (4名)
- ・斎藤隆介 (4名)
- ・安房直子 (3名)
- ・今西祐行 (3名)
- ・宮川ひろ (5名)
- ・あまんきみこ (2名)
- ・那須正幹 (3名)
- ・小川未明 (3名)

局長さんからのアドバイス

- ☆番組は、小学校三年生が分かるような内容を旨としたほうがよい。
- ☆番組を構成するときには、それぞれに役割分担がある。役割をはっきりさせる必要がある。
- ☆視聴者によくわかる工夫、例えばボードに書いたものを見せるなど見せる工夫を！
- ☆メインキャスターとなる人は、番組の進行役。大変だけれども、番組全体を見渡した進行をする。
- ☆助詞(て、に、を、は)は、はっきり話すのだが、強くないようにする。
- ☆アナウンスの時には、伝えたい言葉を強調して話すように意識する。
- ☆語尾を強くしないように話した方がよい。

〈学習を終えた児童の感想〉

四か月にわたってやったので、はじめのころとはかなりたくさん変えたし、局長さんにアドバイスしてもらって数倍うまくなったと思います。テレビにでるということで、普通よりも難しい面もあった大変でした。でも、斎藤隆介さんのことなら、誰にも負けないくらい調べて頭にインプットしました。それに斎藤さんのことがすごく好きになりました。

■実の場を生かした醍醐味

実際に放映するという実の場を学習活動に取り入れることにより学習に緊張感が生まれ、子どもたちが主体的に学習に取り組んでいた。また、テレビ局のプロのアドバイスにより、子どもたちが「その気」になって、力を発揮する姿も多く見られた。子どもたちは、その気になると少々ハードルの高い学習でも成し遂げる。そしてその充実感、達成感が次の言葉の学習への意欲につながると考える。